

「標準外科学」

〔編集責任者〕 武藤 輝一 新潟大学教授
相馬 智 杏林大学教授

東京医科歯科大学教授
村 上 忠 重

たとえ、国家試験を受けるまでの学生達のための教科書とは言え、外科総論と各論を500余頁の中にひとまとめにしたうえ、脳神経外科、小児外科、老人外科まで、あまねく包含し、さらに、一般外科の中にも疫学や臓器移植など、きわめて最新の分野まで盛りこんだ手際は全く見事である。しかも、それぞれの分野の知識がすべて安心して信用出来、憶え込んで損がない。どうしてこんな離れ技が出来たかを考えてみると、新進気鋭の15人の侍大将達が自信をもって分担されたからという一語に尽きる。29年卒クラスに優秀な人物が揃っていることは承知していたが、外科学に限っても、あらゆる分野の専門家が揃っていて、お互がカバーしあっていることが如実に証明されたことになる。卒業後20数年、一番油ののりきったその15人が一つの目的に結集したところが何とも言えずよい。

これまでの教科書の多くは、一つの教室ないしは学派の中で分担され、中には専門でない人も一部執筆

を受け持たされるという憾みがあった。ところが、学派を超越して書かれたこの教科書にはそれがない。全部が専門家の筆になる。したがって無駄がなく、しかも最初の行からコンパクトな知識が記述されている。どうしてどうして、国家試験を受けるまでの学生の bedside どころか、実際の専門家にも役立つ知識が一杯ある。

私も頼まれて教科書の一部を書いたことがある。定義、症状、診断、検査成績、鑑別診断、治療法、予後、とまあこんな順番で各疾患ごとに書き並べ、所々に病態生理、病理組織、疫学などをさし挟むのだが、書く方も退屈であるが読む方も退屈であろう。しかし、教科書というものは、もともと退屈なものであるべきだという観念があったので、仕方がなく書きつづけた。

この本は、この点で型破りである。bedsideで役立つようにという点で、一種の虎の巻式のところがある。表紙が柔かいので持ち運びが容易で、しかも定価が安いから安心してアン

ダーラインが引けたり、書込みが出来るような気がする。大変便利な本である。

しかし、bedside の説明をしているときに、学生はこの本を片眼で見ながらわれわれの説明を聴くようになるのではないかと考えると、その点は大変やり切れない思いがすると現実それも仕方がないことなのであろう。国家試験というものが彼らを縛りつけている以上、憶えなければならぬことが多すぎる。憶え易くするためには、こうした便利な本に頼ることも必要であろう。その意味では、使うのに便利なほどよい本であると言わざるを得まい。

よい意味も悪い意味も含めて、この本はよい外科の教科書である。

最後に、皮肉とお世辞を同時にいえば、医学書院が教科書を安く出そうと心がけるようになったことは、もう一つの大きな進歩である。

B5 頁 544 図 417 ￥6,500

〒300

医学書院刊